

幼児の律動運動能力に関する研究(第2報)

———テスト結果とリズム反応との関連について———

荒 木 恵美子

1. はじめに

幼児の遊びの中には、リズムが充ち満ちているといえる。あるいは、リズムの中に幼児の遊びがあるともいえよう。かくれんぼ、まりつき、なわとび等リズムをもった遊びは数多い。すなわち、幼児の遊びはそれ自体がリズムであり、律動運動である。「リズムが人間のあらゆる反応における基本的傾向であり、また身体的有機体における動作の本質である。」とM・N・ドゥブラー氏が言うように、幼児教育の中でのリズム遊びの位置は高いものであり、意義深いものであると考える。リズム遊びは保育内容—音楽リズムの領域で指導されるようになってきているが、その指導において具体的内容・方法等についてはいまだ明確に示されていない。筆者は音楽リズムの立場から、幼児の行動の基礎的役割をもつ、律動運動の実態を把握し、リズム遊びの効果的な指導法を探索するために、数年にわたり、幼児の律動運動能力テストを試みてきた。…このことは教案の企画、実施、評価といったサイクルの中で、評価の側面のみに限定しているのではなく、全体的な立場から近接していることを断っておかねばならない。

第25回体育学会においては満3歳から7歳までの幼児を対象に、多数の実験結果から総合して「幼児のための律動運動能力テスト項目」を作成した。そして、それらを実験した結果、だいたいにおいて活用できるのではないかという見通しが得られたことを報告した。これらの結果については、さらに修正を加えながら一般化の手続きをたどらねばならないが、今回はこれらの調査の結果に考察を加えると共に、律動運動能力が異なった刺激—反応テスト、即ちリズム反応テストで表出した所の動作とどのような関連があるかを考察する。それらを通してリズム遊びの効率的な指導法は何かに接近するための基礎資料とするものである。

2. 実験方法

(1) テスト項目作成の手続き

律動運動能力テスト項目は、次の資料を参考にして作成したものである。

- 1) 幼児の律動運動能力について(日本体育学会第20回大会～第24回大会発表)
- 2) 幼児の自由遊びの動作分析
- 3) リズム反応テストに表われた動作分析
- 4) 幼児のリズム遊び—自由表現等に表われた動作分析
- 5) Qseretzky 氏運動能力検査法にもとづく組成要素

(2) 律動運動能力テスト項目

上記資料を総合して7種の立場より年齢別に課題を設定した。7種の立場とは次に示すとおりである。

- | 立 場 | 課 題 |
|---------------|--------------|
| 1) リズムの認知 | ——— リズム反応テスト |
| 2) 静的協応 | ——— 片足立ちテスト |
| 3) 継時運動; 結合 | ——— 歩く |
| 4) 継時運動; 空間要素 | ——— 走る |
| 5) 全身協応; | ——— 跳ぶ(単一動作) |

6) 全身協応；リズム —— けんぱ（複合動作）

7) 動的協応；自由遊び —— まりつき

上記の立場より選択した年齢別課題は次のとおりである。なお課題種目については、年齢別に単純～複雑へと意図して配列したものであり、伴奏音楽については幼児のよく親しんでいる曲を多少リズム変化を加えて使用した。



3 歳児

	課 題	リズムパターン	伴 奏 音 楽	テンポ
1)	手拍子		たき火	M.M.J = 120
2)	足踏みと片足立ち		かごめ	♩ = 100
3)	ふつうに歩く・つま先で歩く		カスタの行進	♩ = 126
4)	前後に走る		でんしゃごっこ	♩ = 184
5)	両足とび		かえる	♩ = 117
6)	けんぱ（両足とび・ぱー）		もちつき	♩ = 120
7)	まり投げ（上投げ・両手投）		あまたねぼったん	♩ = 120

4 歳児

1)	手拍子		お手々つないで	M.M.J = 120
2)	足踏み・足裏を片足につけて立つ		かごめ	♩ = 100
3)	ふつうに歩く・つま先で歩く		カスタの行進	♩ = 126
4)	左右に走る		でんしゃごっこ	♩ = 184
5)	ギャロップ		かえる	♩ = 117
6)	けんけんぱ		もちつき	♩ = 120
7)	まりつき・両手捕		あまたねぼったん	♩ = 120

5 歳児

1)	手拍子		むすんで開いて	M.M.J = 120
2)	足踏み・片足前挙伸で立つ		大きな栗の木の 下	♩ = 100

3)	ふつうに歩く・かゝとで歩く		カスタの行進	= 126
4)	走る (左右に自転)		でんしゃごっこ	= 184
5)	スキップ		おつかみありさん	= 100
6)	けんけんけんぱ		もちつき	= 120
7)	まりつき・両手捕		あまだれぼったん	= 120

6 歳 児

1)	手拍子		けんぱの歌	= 120
2)	足踏み・ももを挙げて片足立ち		大きな栗の木の 下	= 100
3)	ふつうに歩く・しゃがんで歩く		カスタの行進	= 126
4)	走る (左右に回転)		でんしゃごっこ	= 184
5)	ホップ		10人のインデアン	= 124
6)	けんぱ (歌に合わせて) (けんけんぱ, けんぱけんぱ けんけんぱ)		けんぱの歌	= 120
7)	まりつき (3回ついて両手捕)		あまだれぼったん	= 120

7 歳 児

1)	手拍子		でんしゃごっこ	= 120
2)	足踏み・片足後拳で立つ		大きな栗の木の 下	= 100
3)		削 除		
4)		削 除		
5)	しゃがんで跳ぶ		はと	= 120
6)	けんぱ (歌に合わせて) (けんけんぱ けんけんけんぱ けんけんぱ)		けんぱの歌	= 120
7)	まりつき (歌に合わせて)	省 略	あんたがたどこさ	= 120

(3) 実験の方法

調査期間、昭和49年3月

対 象、岡山市内保育園、幼稚園、3・4・5・6歳児各30名、計120名

実験方法、被験者6名について団体検査法にて行う。まず、実験者がテストの方法について説明と示範をし、被験者に模倣させる。テストは種目別に歴年齢の項目を与え、合格すると次の年齢のテストへ順次進み、不合格ならば年齢を下げて行う。

(4) 評 価

観察者3名が次に示す評価基準にもとづき評価する。

○印—テストパターンが2回以上くり返してできる (合格)

△印—テストパターンが1回できる (不合格)

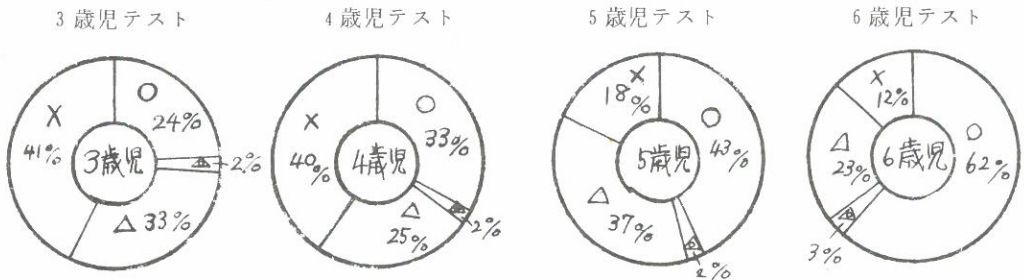
△印—曲に合わないが動作はできる (不合格)

×印—動作ができない (不合格)

3. 結果と考察

(1) 年齢別考察

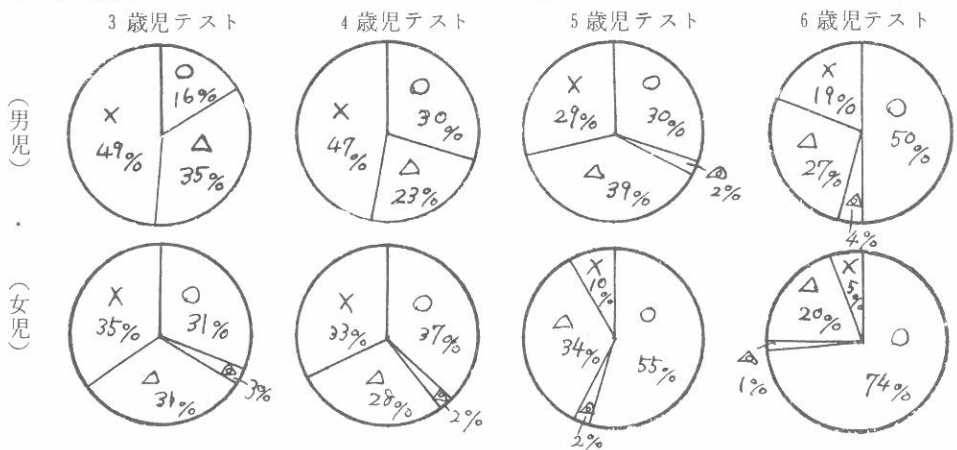
設定した律動運動能力テストにおける調査の結果を各々の年齢段階においてその成績をみると次の図のとおりである。



設定した年齢別律動運動能力テスト項目は3歳児、4歳児、5歳児ともにやゝむつかしい設定のようである。6歳児については6歳児用運動項目に合格したもの62%で、だいたいにおいてやり易い設定のようである。

(2) 性別比較

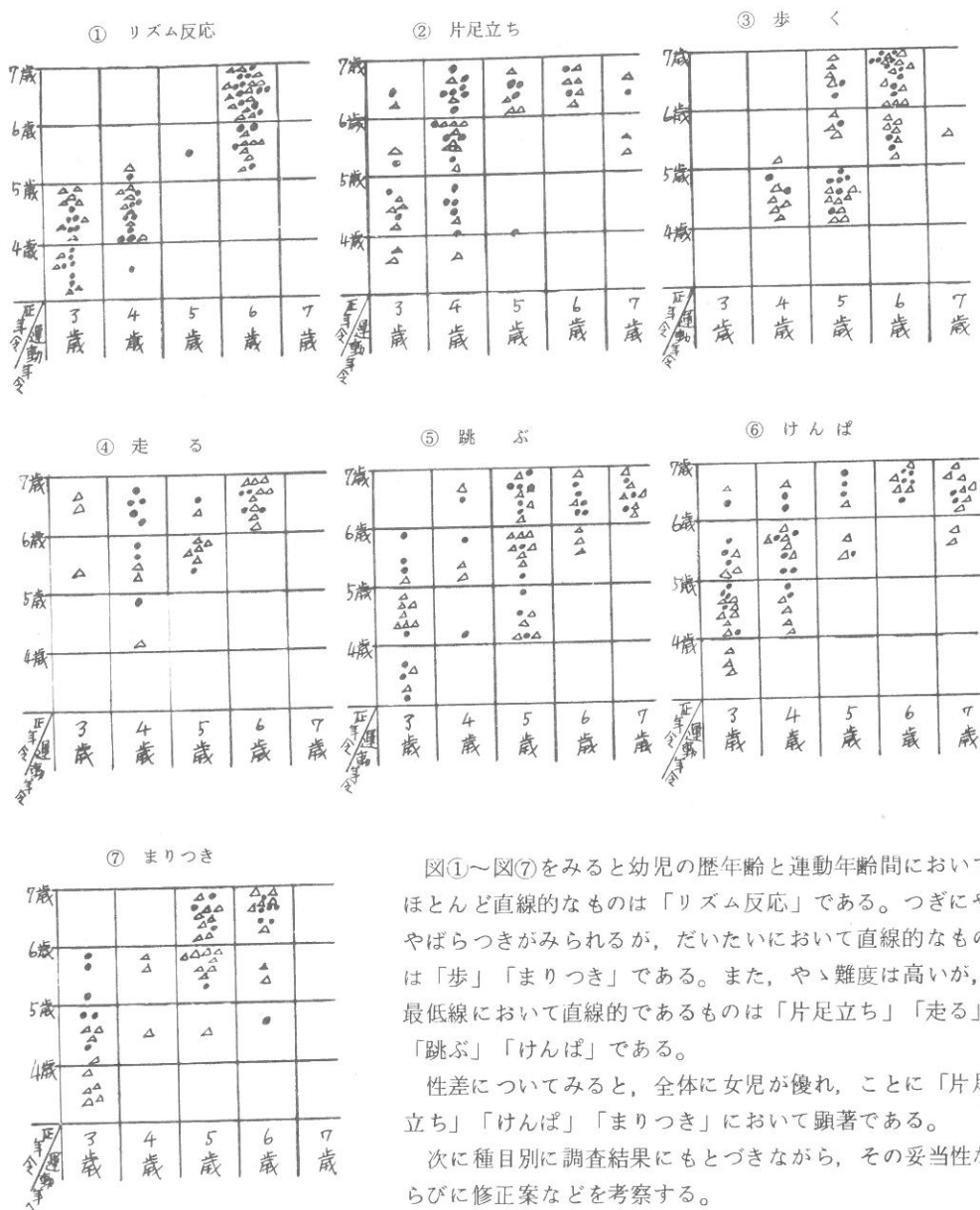
上記の調査結果を性別に比較すると次のとおりである。



いずれの年齢においても女児が男児よりかなり優れているといえる。

(3) 種目別考察

つぎに示すグラフは合格したものについて歴年齢と運動年齢間における関係を調査種目別に表わしたものである。(●印男児, ▲印女児)



図①～図⑦をみると幼児の歴年齢と運動年齢間において、ほとんど直線的なものは「リズム反応」である。つぎにややばらつきがみられるが、だいたいにおいて直線的なものは「歩」「まりつき」である。また、やや難度は高いが、最低線において直線的であるものは「片足立ち」「走る」「跳ぶ」「けんば」である。

性差についてみると、全体に女児が優れ、ことに「片足立ち」「けんば」「まりつき」において顕著である。

次に種目別に調査結果にもとづきながら、その妥当性ならびに修正案などを考察する。

① リズム反応テスト

各年齢とも運動年齢と歴年齢間において、ほとんど直線的な分布を示している。このことは両者の相関を示すものでありテストバッテリーを作成する上で活用できるものであろう。しかし、5歳児に設定した項目 ♪♪♪♪。で拍手する

場合、合格したもののほとんどが6歳児の項目に進んでおり、不合格者のほとんどが全音符の「間」がもたないものであり、リズム構成において修正の必要があると考えられる。したがって、5歳以外の3歳児項目、4歳児項目、6歳児項目についてはバッテリーテストを作成する上で活用できよう。

② 片足立ちテスト

全体が左方へかたよった分布曲線を描き、ややむつかしい設定のようである。ことに5歳児項目、6歳児項目については分布幅が大きく、ばらつきがみられる。そしてともに、4歳児に設定した項目に合格者が集中していることから、項目の設定を全体に少し易しく修正する必要があると考えられる。ことに不合格者の多くは、片足で立つ時の「間」が保持できないもののもっとも多く、ついで足踏みから片足立ちへ移行する時の動作結合が乱れるもの等であり、やや項目の設定にむつかしさがある。

従って運動年齢をそれぞれ下げて行えば活用できると考えられる。

なお、このテストにおいてその分布曲線を見ると、3歳から4歳にかけてよい成績を示しており、このことからバランス運動は3歳から4歳にかけて発達すると考えられる。このことは過去の資料で得られたバランステストにおいても同様の傾向を示していることから、教授内容に片足立ち動作を含むプログラムを3歳児、4歳児に組むことは教授-学習過程における効率化を物語るものであるといえる。

③ 歩くテスト

ややばらつきがみられるが、ほとんど直線的であり、テストバッテリー作成の上で利用できる見通しが得られた。ただし、3歳児項目に合格者が全くない点が注目され、このことについて過去の資料と比較すると「歩く」「つま先歩き」の種目を単独とするときには「歩く」60%、「つま先歩き」40%と約半数ぐらいの成功率を示していたにもかかわらず、組み合わせたために合格率がゼロになったということは3歳児に組み合わせは不可能であり、かつ不必要であるとも考えられる。


④ 走るテスト





「片足立ちテスト」と似た左方へのかたよりを示しており、最低線において直線的である。しかし全体にはややばらつきがみられ、修正が必要である。過去の資料ならびに、今回のテストで不合格になった理由などから考えると「歩く」と同様、単独にはできるにもかかわらず、空間上の組み合わせをした場合の結合ができないことから、それぞれの年齢において組み合わせ方の工夫が必要である。ことに速度感を必要とする動作においての休止と運動に入る前の準備相としての伴奏の工夫も必要と考えられる。

⑤ 跳ぶテスト

跳ぶ動作は幼児の自由遊び等でもかなりの頻度で現われ、もっとも律動的な全身協応種目と言える。この種目については、前報までの律動運動能力テストで得られた資料にもとづき、年齢別に易から難へと配列したものである。結果は全体にややばらつきがみられるが、ほとんど直線的な分布を示しているののでだいたい活用できると考える。しかしギャロップについては問題が残る、再度検討の必要がある。

⑥ けんぱ

「跳ぶ」の単一テスト項目に対して組みテストとして設定したものであり、幼児が自由に選んで遊ぶ種目、すなわち遊びそのものとして幼児期の運動技術の発達状況に即して組んだものである。分布の傾向は「跳ぶ」と同様の傾向を示しているが、やや3歳児、4歳児項目に合格者が集中している。とくに5歳児項目については合格者が少なく  と休止符のない

連続動作に反応できないことがその原因と考えられる。不合格者の中で不合格になった理由の多くは、リズムが不規則になる、けんけんが多くなる  などであり、その他は頻度はわずかであるが種類が多く試行錯誤のパターンが多様化している。例えば「けん、けん、ぱー、ぱー  とか  のリズムで「間」がのびるもの、あるいは  のリズムで「ぱー」の所が両足同時着地にならず異時着地になる、又最初の出だしが遅れるなど複雑な様相を示し、これらは「ぱー」の部分の「間」の長短が適切でないところから来るゆえんの様である。

従って律動運動の繰り返しには長短の組み合わせ、あるいは動と静の組み合わせ等リズム構成の妙味がこゝにあるようでこの点を考慮して修正する必要があるように思われる。

この種目については5歳児項目にやゝ問題があるが分布状態をみたとき最低線において直線的でありテストバッテリー作成上活用できると考える。

⑦ まりつき

「けんぱ」と同様、幼児が自由に選ぶ遊び種目の中でも、もっともリズムカルな動的協応能力を要する種目である。そして歌を伴う遊び種目として昔から幼児の遊びの中で伝承されており、テストに際しても幼児がもっとも興味を示した種目の一つである。年齢別に配列されたテスト項目では図で明らかなように、4歳児の合格者数がやゝ少なく問題が残るが、それ以外すなわち3歳児、5歳児、6歳児項目についてはほとんど直線的であり、テストバッテリーとしてこのまゝ組み込めるのではないかと考える。4歳児項目において不合格になっているものについての理由をみると、リズムに合わないもの、ボールの弾みに対して反応できないものなどがその主なものである。

なおこの種目については自由遊びと直結していることから学習実験をすることによって、さらに妥当性を追求する必要がある。

以上、種目ごとの考察をすすめたが今回のテスト項目で、そのまゝテストバッテリーとして組み込めるであろうと考えられる種目は次のとおりである。

表 1

テ ス ト 項 目	3 歳 児	4 歳 児	5 歳 児	6 歳 児
① リズム反応テスト	手 拍 子 7 っ 打 ち	手 拍 子 3 っ 打 ち	(手拍子) 	手 拍 子 3 っ 打 ち と 7 っ 打 ち
② 片足立ちテスト	(片足立ち) 	足裏を片足につけて 	片足前拳伸で 	ももを挙げて立つ 
③ 歩 く	(ふつうに歩いてつま) (先で歩く)	(ふつうに歩いてつま) (先で歩く)	(ふつうに歩いてかゝ) (とで歩く)	ふつうに歩いて しやがんで歩く
④ 走 る	(前後に走る)	(左右に走る)	左 右 に 自 転	左 右 に 回 転
⑤ 跳 ぶ	(両足とび)	(ギャロップ)	ス キ ッ プ	(ホップ)
⑥ けんぱ	両 足 と び と 両 脚 と び	けんけん ぱ	(けんけんけんぱー)	けんぱの歌に 合わせて
⑦ まりつき	上投・両手捕 	(つく・両手捕) 	つく・両手捕 	つく・両手捕 

なお()内の項目については、動作の組み合わせ方、リズムパターンの構成、空間構成等を考慮して、再度検討して修正あるいは新たに項目設定をする必要があると考えられる。

4. 「律動運動能力テスト」と「リズム反応テスト」に表われた表現動作との関連について

上述のように律動運動能力テストにおいて年齢別に仮に設定したテスト項目は多少修正されなければならないが、だいたいにおいてバッテリーテストとして組み込める見通しが得られた。このことは先にも述べたように、評価の側面のみに限定しているのではなく、教育目的・内容・方法に関連した設定であるということから、あくまでもこれらの結果は教授・学習内容と密着したものでなければならない。そこで刺激・反応の形で表出した今回の律動運動能力がリズム反応テスト—即ち音楽のリズム、ならびに動きのリズムより選んだ76種のリズムパターンを刺激として与え、幼児が即座に反応して表現した動作—とどのような関連をもっているか。いいかえると、幼児自らが持っている能力をリズム刺激による他の条件のもとでどのように表出していくかを知ることにより律動運動能力テストの再修正の資料としていくこと、そして教授・学習行動および目標行動の設計に接近していきたい。

表2で示すように「歩く」「走る」「跳ぶ」を中心とした動作形態はいくつかの同じ傾向をもったものがある。これはパターンとして表現された動作と動作との組み合わせ方に「歩と歩」「歩と跳」「跳と歩」「跳と跳」等類似のパターンが多くみられ、年齢が進むにつれて単純な組み合わせから複雑なものへとなる。又動作そのものも易から難へと広がり示し、幼児の表現能力の発展がみられる。

年齢別に動作パターンの組み合わせ方をみると、3歳では「ウォークとスキップ」「スキップとウォーク」の2種目、4歳では「ウォークと両足とび」「スキップとウォーク」「両足とびとウォーク」「ギャロップとウォーク」の4種目のみであり、3・4歳児ではその種類は非常に僅かである。このことは、律動運動能力テストでも同様の傾向が得られ、3・4歳児には組み合わせの動作を与えるより、単独の動作を十分させていく事がリズム遊びを指導していく上で効率的であるといえよう。ところが5歳になると急激に増加し、18種の組み合わせがなされ、6歳になると19種で種類は余り差がみられないがその頻数は急激に増加している。律動運動能力テストにおいても、3・4歳児にくらべて、5・6歳児では合格者が多いことから組み合わせ動作を含めた教授内容も学習の効率を高める一方法と考えられる。このことはM幼稚園で指導された3歳児と5歳児の自由表現「蝶」について動作分析した結果においても同様のことがいえる。3歳児では単一動作が殆んどで蝶が飛ぶ所といって「走る」のみであるが、5歳になると組み合わせ動作がかなり使用されている。例えば「小走りして・ウォーク」「小走りしてしゃがむ」「小走りして膝屈伸」などである。

つぎに動作と動作の組み合わせの仕方を見ると「スキップとウォーク」がもっとも多く、ついで「ホップとウォーク」「両足とびとウォーク」などであり、そのほとんどは「跳ぶ」動作と「歩く」動作が組み合わさったものである。このことは繁下和雄氏が「音楽教育研究」で述べているところの帰結のリズムと一致するのではなかろうか。幼児の行動そのものは低次な段階であり、その行動はいかにも原始的である。そして遊びそのものは帰結部から覚えられていくし、帰結がなければ遊びが成り立たないともいう。幼児が歌を覚えるときにも、これと同様に帰結部から覚えていき、リズムに反応して自由に動いた動作にも同様の傾向がみられる。前述の蝶の自由表現においても全く一致する。即ち「跳ぶ」という緊張動作のあとに「歩く」という弛緩動作が組み合わせられるのである。そして年齢が低い程そのことはあてはまりここに幼児のリズムが存在し、組み合わせ動作のはじまりがあるのでなかろうか。律動運動能力テストの「けんば」の項目で5歳児の設定で休止符のない連続動作が幼児のリズミカルな反応を阻害していると考えたが、このこととも一致している点からも、上記のことがうなづける。

今回の律動運動能力テストにおいて修正されなければならないと指摘したものに「歩く」「走る」「跳ぶ」などがあげられるが、前述のことから考え、再びテスト項目作成の時点へフィードバック

表2 「リズム反応テスト」に表われた組み合わせ動作

(44年度, 45年度, 47年度
調査資料より)

<ウォークと結合動作>

分類	番号	動 きの 種 類	頻 数					
			3才	4才	5才	6才	小2	計
○-●	1	ウォークとスキップ	4	0	4	4	14	26
○-●	2	〃 ホップ	0	0	2	10	5	17
○-●	3	〃 両足とび	0	4	0	2	8	14
○-●	4	〃 スキップ・ウォーク	0	0	1	1	3	5
○-○	5	〃 ツーステップ	0	0	0	0	4	4
○-○	6	〃 フォロー	0	0	1	0	2	3
○-●	7	〃 ホップ・ウォーク	0	0	0	2	1	3
○-▲	8	〃 ポーズ	0	0	0	1	2	3
○-▲	9	〃 半屈膝	0	0	2	0	0	2
○-●	10	〃 とび込み	0	0	1	0	1	2
○-●	11	〃 ジャンプ	0	0	0	0	1	1
○-●	12	〃 ホップ・のびる	0	0	0	0	1	1
○-●	13	〃 横カッ・ホップ	0	0	0	0	1	1
○-●	14	〃 ホップ・ウォーク	0	0	0	0	1	1
○-●	15	〃 横にとび込み	0	0	0	0	1	1
○-●	16	〃 スキップ・しゃがんでとぶ	0	0	0	0	1	1
○-●	17	〃 片足とび	0	0	0	0	1	1
○-○	18	〃 追歩	0	0	0	0	1	1
○-○	19	〃 ウォークターン	0	0	0	0	1	1
○-※	20	〃 四つ這い	0	0	0	0	1	1
○-▲	21	〃 足あげ	0	0	0	0	1	1
○-▲	22	〃 膝屈伸	0	0	0	0	1	1
○-△	23	〃 ランニング・とび込み	0	0	0	0	1	1
○-△	24	〃 ランニング・スキップ	0	0	0	0	1	1
○-△	25	〃 追歩とランニング	0	0	7	0	1	8
○-●	26	〃 両足とび	0	0	0	0	3	3
○-○	27	〃 ウォーク	0	0	0	0	3	3
○-●	28	〃 スキップ	0	0	0	0	1	1
○-●	29	〃 スキップウォーク	0	0	0	0	1	1
○-●	30	〃 横に追歩・とび込み	0	0	0	0	1	1
○-○	31	〃 ツーステップとウォーク	0	0	0	0	2	2
計			4	4	18	20	66	112

<ランニングと結合動作>

分類	番号	動 きの 種 類	3才	4才	5才	6才	小2	計
△-●	1	ランニングとスキップ	0	0	2	0	9	11
△-●	2	〃 ホップ	0	0	1	0	5	6
△-●	3	〃 とび込み	0	0	0	0	5	5
△-●	4	〃 ジャンプ	0	0	1	0	2	3
△-▲	5	〃 しゃがむ	0	0	0	0	2	2
△-●	6	〃 スキップ・ランニング	0	0	0	0	2	2
△-●	7	〃 両足とび	0	0	0	0	1	1
△-●	8	〃 横カッ	0	0	0	0	1	1
△-●	9	〃 片足とび	0	0	0	0	1	1
△-△	10	〃 ランニングターン	0	0	0	0	1	1
△-○	11	〃 つま先立ち	0	0	0	0	1	1
△-△	12	〃 しゃがんでランニング	0	0	0	0	1	1
△-○	13	〃 ウォーク	0	0	0	0	1	1
△-●	14	〃 とび込み・ランニング	0	0	0	0	1	1
計			0	0	4	0	33	37

<跳ぶと結合動作>

分類	番号	動 きの 種 類	3才	4才	5才	6才	小2	計
●-○	1	スキップとウォーク	4	1	11	42	47	105
●-●	2	〃 両足とび	0	0	14	4	10	28
●-○	3	〃 ターン	0	0	0	1	21	22
●-▲	4	〃 とまる	0	0	0	0	16	16
●-●	5	〃 とび込み	0	0	0	0	10	10
●-●	6	〃 ホップ	0	0	0	0	5	5
●-△	7	〃 ランニング・スキップ	0	0	0	1	4	5
●-△	8	〃 ランニング	0	0	0	0	2	2
●-▲	9	〃 膝屈伸	0	0	0	0	2	2
●-▲	10	〃 足踏み	0	0	0	0	1	1
●-▲	11	〃 しゃがむ	0	0	0	0	1	1
●-▲	12	〃 ポーズ	0	0	0	0	1	1
●-●	13	〃 両足とび・スキップ	0	0	0	0	1	1
●-●	14	〃 しゃがんで両足とび	0	0	0	0	1	1
●-▲	15	〃 足あげ下ろす	0	0	0	0	1	1
●-○	16	〃 ターン・両足とび	0	0	0	0	1	1
●-○	17	〃 両足とびとウォーク	0	2	10	6	1	19
●-●	18	〃 スキップ	0	0	1	0	4	5
●-▲	19	〃 足ふみ	0	0	0	0	4	4
●-▲	20	〃 全屈膝・両足とび	0	0	0	4	0	4
●-○	21	〃 追歩	0	0	0	0	1	1
●-▲	22	〃 しゃがむ	0	0	0	0	1	1
●-○	23	〃 ウォーク・両足とび	0	0	0	1	0	1
●-●	24	〃 片足とびと両足とび(けんけんぽ)	0	0	0	0	22	22
●-○	25	〃 ウォーク	0	0	0	0	2	2
●-●	26	〃 両足とび	0	0	0	1	0	1
●-●	27	〃 スキップ	0	0	0	0	1	1
●-○	28	〃 ギャロップとウォーク	0	2	0	0	0	2
●-●	29	〃 両足とび	0	0	0	0	2	2
●-●	30	〃 スキップ	0	0	0	0	1	1
●-●	31	〃 とび込んで両足とび	0	0	0	0	11	11
●-▲	32	〃 しゃがむ	0	0	0	0	8	8
●-○	33	〃 ウォーク	0	0	0	0	3	3
●-○	34	〃 ターン	0	0	0	0	3	3
●-▲	35	〃 足ふみ	0	0	0	0	2	2
●-○	36	〃 ホップとウォーク	0	0	4	17	22	43
●-△	37	〃 ランニング	0	0	1	7	6	14
●-○	38	〃 フォロー	0	0	4	0	0	4
●-●	39	〃 とび込み	0	0	0	0	4	4
●-▲	40	〃 おろす	0	0	0	0	3	3
●-○	41	〃 ツーステップ	0	0	1	1	0	2
●-●	42	〃 両足とび	0	0	0	1	1	2
●-△	43	〃 ランニングターン	0	0	0	0	2	2
●-○	44	〃 ターン	0	0	0	0	2	2
●-▲	45	〃 膝屈伸	0	0	0	0	1	1
●-▲	46	〃 足ふみ	0	0	0	0	1	1
●-○	47	〃 フォローターン	0	0	0	0	1	1
●-△	48	〃 ホップターンとランニング	0	0	0	0	1	1
●-○	49	〃 ウォーク	0	0	0	0	1	1
計			4	5	46	86	235	376

記号 ○-歩く △-走る ●-跳ぶ ▲-その場 ※-その他

した時、三者の組み合わせを柱にすることが必条のようである。又、リズム反応テストにおいて表出される動作は、特定の条件のもとに即座に反応したものであり、そこでは対象の能力として本当に身についたもの、いいかえると定着したもののみ表現されたものである。その場合、能力の全てが充分表現されたものでなく、一部の表現でしかないことから、幼児のテスト項目作成において当然高学年のそれを参考にすることが必要である。表2に小学校2年の動作を列記しているが、幼児に比較すると種類、頻度ともに急激に増加し組み合わせの多様化が見られる。これらの動作を参考にテストバッテリーを組む必要がある。

なお、律動運動能力テスト項目として選んだ「バランス運動」「けんば」「まりつき」等については、リズム反応テストとの関連をみる事ができなかったが、今後、自由遊び、設定保育等の関連の上で更に研究を深めていきたい。

5 ま と め

以上、律動運動能力テストを通して幼児の発育発達の状態を位置づけて来た。その結果、リズム遊び指導の観点から上述のテストバッテリーは少くとも一つの参考資料として役立つものとする。但し、この論は主として、システムマネジメントの立場から考察しているにすぎないという感は免れないが、断ったように、分析→計画→実施→評価というサイクルのなかで把握するために、テストバッテリーの問題点の解消、さらに広く教育の最適化をめざすための研究が必要不可欠である、と結論したい。

この論文は日本体育学会第25回大会において口頭発表したものを基礎に、その後の考察を加え整理したものである。

参 考 文 献

- 1) M・N・ドウブラー著、松本千代栄訳、舞踊学原論、大修館書店。
- 2) R, L・マレイ著、松本千代栄・佐藤康子訳、ダンス学習法、大修館書店。
- 3) ヒーザ・ゲル著、河井富美恵訳、児童のためのリズム運動、大修館書店。
- 4) 邦正美、動きのリズム、万有社。
- 5) 繁下和雄、拍子打ちとリズム教育、音楽教育研究、1973. № 87. 音楽之友社刊
- 6) 江崎正剛、リトミック教育の思想と実践、音楽教育研究、1973. № 87. 音楽之友社刊
- 7) 西谷怜子、舞踊における動きのリズムについて第2報—リズム反応テスト—、研究紀要、第17号、1973. 岡山県立短期大学。
- 8) 磯島松子、舞踊作品の分析的研究、一創作過程の分析—、研究紀要、第17号、1973, 岡山県立短期大学。
- 9) LUDWIG KLAGES ; 杉浦実訳、リズムの本質、みすず書房
- 10) 金子孫牛編、教育工学と授業システム化入門、明治図書
- 11) 坂元昂編、教授学習過程のシステム化、明治図書
- 12) Kurt, Meinel ; Bewegungslehre, Volkund Wissen Volk Seigener, Verlag Berlin, 1962
- 13) 荒木恵美子、日本体育学会第25回大会号、P. 331